令和6年度岐阜県犬の咬傷事故防止に係る検討会議 議事要旨

1 日 時

令和6年12月26日（木） 13:30～15:30

2 場 所

県庁 302会議室 又はオンライン

3 出席者

○委員7名（委員8名のうち1名欠席）

氏 名	所属団体・役職等
もり たかし 森 崇	岐阜大学応用生物科学部附属動物病院 教授
あさの あきこ 浅野 明子	高木國雄法律事務所 弁護士
はせがわたかあき 長谷川孝明	公益社団法人岐阜県獣医師会 副会長
おくだ よりゆき 奥田 順之	日本獣医動物行動研究会 動物行動学診療認定医
いのまた ともお 猪股 智夫	公益社団法人日本動物福祉協会 理事
たぶち てつじ 田渕 哲次	公益社団法人日本警察犬協会 中部支部連合会会長
あべ みつひろ 阿部 光宏 (代理 こばやし よしこ 小林 佳子)	岐阜市保健所生活衛生課 課長 (岐阜市保健所生活衛生課動物管理指導係 係長)

○事務局（岐阜県健康福祉部生活衛生課）

安江 智雄 生活衛生課長

河合 邦育 動物愛護係長

大林 賢伍 主任技師

4 議事概要

事務局から、前回の検討会の経緯を踏まえた現在の県の咬傷事故防止対応、現状分析、今後の対応案（県民に対する咬傷事故防止に係る啓発の強化策、大型犬等への対策のあり方）について説明を行った後、委員との意見交換を行った。

しつけについて

【浅野委員】

- ・ 咬傷犬の飼い主の約7割が飼い犬に対する評価として基本的なしつけはできていると認識しているが、この「基本的なしつけ」はどのような内容か。

（事務局）

- ・ 犬の適正飼養管理指導マニュアルには適切なしつけとして、オイデ、マテや散歩時の引っ張り癖の矯正など周りの人に迷惑をかけないようにするしつけと定義している。
- ・ 実際にどのようなしつけを行えば、咬傷事故を防げたのかがわかるとよい。
- ・ 咬傷事故が発生した際に、犬の飼い主にしつけの講習へ行くよう助言指導することにはどうか。

【奥田委員】

- ・ 成犬の行動修正は容易ではない。行動修正には飼い主の技術も影響することから、環境修正の方が確実性が高い。実際には咬傷事故を起こした成犬の飼い主に対しては、犬の飼養環境を変えることで、咬傷事故を予防していくことについての指導が中心になる。

【長谷川委員】

- ・ 全ての犬について訓練士や行動学の先生にしつけてもらうのが理想だが、飼い主への義務付けは難しいのではないか。

【田渕委員】

- ・ 犬の基本訓練は散歩時に飼い主に素直についてくること、リードが手から離れたとしても呼んだらすぐに戻ってくることの2つである。
- ・ 警察犬のような訓練を行えば犬をコントロールできるようになるが、成犬になってからの訓練で改善するのは難しい。

啓発対象や方法について

【森委員】

- ・ 犬の未登録、狂犬病予防注射の未接種の飼い主が一定数いると考えられるため、登録や狂犬病予防接種時以外にもトリミングサロンや動物

病院に啓発の協力もらうなど連携が必要ではないか。

【浅野委員】

- ・ 重点的に啓発すべき対象を抽出するために、保健所の調査時に事故を起こした飼い主に対して、入手ルートを調査するようにするといいいのではないか。

【奥田委員】

- ・ 啓発対象の追加や媒体方法の見直しを検討しているか。

(事務局)

- ・ 登録時及び集合注射会場や動物病院での狂犬病予防注射接種時のリーフレットの配布は最も効率的であるため、引き続き行いたい。
 - ・ 配送業者や点検業者の方も実際に事故が起こっているので、事故の発生状況を関係団体に伝えたい。
 - ・ 大型犬等の飼い主への啓発は狂犬病予防法に基づく登録業務を行っている市町村との連携し、実施を検討したい。
 - ・ 犬の飼い主以外の県民については、動物愛護週間のイベントや学校の動物愛護教室等、様々な場での啓発を考えている。
- ・ 単に「しつけをしましょう」というだけでは伝わりづらい。犬の飼い主に求められることを具体的に伝えるとよい。
- ・ トリミングサロン、ペットショップ、動物病院と連携できる仕組みがあるとよい。ピットブルやロットワイラー等の大型犬は専門的に扱っているブリーダーによる繁殖、育成がほとんどと考えていいだろう。こうしたブリーダーとの連携も必要である。

【長谷川委員】

- ・ 県内の大型犬のブリーダーを対象に咬傷事故に関する資料の送付や注意喚起文書を送付することは効果的なのではないか。

【猪股委員】

- ・ ペットショップやブリーダーは購入者に対して咬傷事故のことや犬種の特徴をしっかりと説明する必要がある。また、狂犬病予防注射の未接種の事例があるのであれば、併せて啓発する必要がある。

動物取扱業者への啓発について

【森委員】

- ・ 動物取扱業者の啓発について、県で年1回開催している動物取扱責任者の研修会で、咬傷事故に関して特別な話を行っているか。

(事務局)

- ・ 動物取扱責任者研修会は従来、毎年受講が義務付けられていたが、令和5年度から5年に1回の受講になっている。研修会の資料

には咬傷事故に関するトピックスを設け説明している。

【奥田委員】

- ・ 犬のしつけの話は動物取扱責任者には興味があるのではないか。継続研修でもっと取り上げてほしいと思う。

令和5年度の啓発ポスターについて

【猪股委員】

- ・ 啓発ポスターの柴犬が牙をむいているようで、犬が可哀そうであり、また見た人に恐怖感を植え付けてしまう。

(事務局)

- ・ 咬傷事故は飼い主の責任だということを強調するため、しつけができていない犬をイメージしてポスター作成した。

【田渕委員】

- ・ 啓発ポスターに口輪を装着した犬が、子供と戯れている様子などはどうか。

海外の動向について

【浅野委員】

- ・ ヨーロッパでは購入時にしつけ教室に通うことを義務化している国もあると聞く。しつけを教えてくれる場所も多数あると聞いている。

【奥田委員】

- ・ スイスでは2017年までは犬を飼育する際に8時間の講習を受けなければならないとされていたが、現在、法改正で義務ではなくなっている。

必要に応じた口輪の装着に関する啓発について

【森委員】

- ・ 口輪の装着は法律的に指導できるものなのか。

(事務局)

- ・ 動物愛護法の家庭動物等の飼養及び保管に関する基準の中で危険犬は、飼い主が犬の行動を抑制できなくなった場合に重大な事故を起こすおそれがあるため、道路等屋外で運動させる場合には、必要に応じて口輪を装着するように記載がある。

【奥田委員】

- ・ 口輪の装着自体のストレスは個体差が大きい。首輪やハーネスの装着でもストレス反応が高い犬がいるが、マズル付近は、犬が嫌がりやすい部位でもあるし、練習していないとストレス反応は高くなりやすい。また、嫌がっている犬に装着することで高いストレス反応が生じることがある。

【猪股委員】

- ・ 口輪というのは動物福祉の観点で見ると動物の基本的な行動を奪うことになると思うがいかがか。

【田淵委員】

- ・ 口輪の装着は散歩中に拾い食い等をして寄生虫に感染するリスクも少なくなる。いつも口輪を装着して散歩すれば、散歩＝口輪となり喜んで装着するようになる。

咬傷事故を起こした飼い主の責任について

【浅野委員】

- ・ 飼い主等に問題がなければ飼い主自身に責任はなく、免責されると誤解しているケースが多い。
- ・ あらゆる咬傷事故について、原則として飼い主の責任は免れない。

【小林委員】

- ・ 咬傷事故で損害賠償が発生した場合の具体的な賠償金額がわかると飼い主としては参考にして気を付けるので、具体例をホームページに載せて周知するのはどうか。

(今回の会議を総括して)

【森委員】

- ・ 今回まとめた情報をもとに啓発の方法を工夫していく必要がある。
- ・ 国の方でも何らかの対応が求められるが、まずは岐阜県でできることを今回の会議の意見を参考に実施していけるとよい。

(事務局)

- ・ 今回いただいた提案を参考に、必要な方に対し、効率的で効果的な啓発に努めていきたい。